
幸せの木と狂った世界と。

火野村祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの木と狂った世界と。

【Nコード】

N8440Z

【作者名】

火野村祭

【あらすじ】

死と生が繰り返される場所、ハッピーツリーの街。

狂った人々が住むその街に紛れ込んだのは、1人の“国”だった。

国擬人化作品・ヘタリアと、アメリカングロアアニメ・Happy Tree Friends擬人化の、クロスオーバー！。

ハッピーツリーのおはなし

むかしむかし、どこかとおくのまちのそらのうえに、ふこうのかみさまがすんでいました。

ふこうのかみさまがそらのうえにいるそのまちでは、とてもふこうなことが、まいにちまいにちおこっていました。

『おお、ごめんよ、ごめんよ、みんな。わたしのせいで。』

ふこうのかみさまはなげきました。そのあいだも、まちではさんげきがくりかえされていました。

『このままではいけない。わたしになにかできることはないだろうか。』

ふこうのかみさまはかんがえました。ふこうのかみさまがみおろしたまちでは、きょうもだれかがしんでいました。そして、しんだひとのたいせつなひとが、なみだをながしてかなしんでいました。

『そうだ。しななければいいのではないか？』

かみさまはおもいつきました。

かみさまはふこうのかみさまだから、ふこうをなくすことはできません。

だから、ふこうとどうじにしあわせがあればいいとおもったのです。だれかがしねば、だれかがかなしむ。それが“ふこう”ならば、しななければ“しあわせ”なはずだと。

かみさまは、さっそくじつこうにうつりました。

そのまちのまんなかに、ハッピーツリーという、“しあわせ”をよぶ木をつくったのです。

『これでみんなしなない。これでみんなしあわせだ』

かみさまはそういつてわらいました。

つぎのひから、ハッピーツリーのおかげで、みんなはしなくなりました。

ふこつがなくなることはありませんでした。みんなみんな、ふこつにあつて、まいにちとてもつらいおもいをするのは、かわることはありませんでした。

でも、しななくなりました。

だって、もし、だれかがしんだり、けがをしたりしても、ハッピーツリーのおかげで、いきかえることができるようになったのだから、ひとびとは、そのことをぶきみにおもいました。

ハッピーツリーをきってしまったえば、そのようなことはなくなるかとおもいましたが、だめでした。もう、まちじゅうに、ハッピーツリーの根がはっていたからでした。

やがて、そのまちにはくるったひとびとしかいなくなりました。

そして、そのまちはやがてまぼろしとなりました。

そのまちは、まちのひとびととともに、いまもどこかにそんざいしているそうです。

そして、きょうもそのまちでは、“ふこつ”と“しあわせ”がくりかえされているそう。

ハッピーツリーのおはなし

おわり

ハッピーツリーのおはなし（後書き）

やっちまいましたへタリア×ハピツリ…！

あ、ひらがな多くてすみません…読みづらいですよ…。
次の話から本編です。よろしく願います。

その1 不幸に逢った日(前書き)

本編始まります。さっそくちょっと痛い描写あるのでご注意ください。
ヘタリアの世界から始まります。

その1 不幸に逢った日

子供のころ、変な童話を聞いたことがある。

『ハッピーツリーのおはなし』、という童話だ。

とても短い話だったけど、幼い俺にとってそれはトラウマ以外の何物でもなかった。

不幸の神様の創った“ハッピーツリー”は、死んだ人々を生き返らせる不気味な力をもっていて、それはやがて狂人ばかりの街を作った。その街は幻となり、今でもどこかに存在するらしい。という、童話にしてはえぐすぎる内容だ。今思えば、こんな話を作ったやつを探し出して殴ってやりたいくらいだ。

教訓らしい教訓も見つからないこの童話はほんとに童話なのかと疑ってしまっただ。

もしかして本当の話かもと考えたこともある。が、ありえないとすぐ片付けてしまった。

けど、まさかあんな形で、事実を知ることになるなんて、俺は思ってもみなかった。

*

「アメリカ、これから飯にでも行かないか……って、アメリカ？大丈夫か？」

「っえ！？な、なんだいいギリス。ヒーローは居眠りなんてしてないんだぞ！」

居眠りしてたんだな……。とイギリスは呆れ顔になる。世界会議が終了して数分たった今、もう窓の外は暗くなっている。会議場に残っている人（？）もごく少数になっていた。

「てかほんとに大丈夫か？顔色悪いぞ、お前」

「あー、うん…最近どうも、夜寝付けなくてね。寝不足気味かも」
アメリカはそう言っていると、大きなあくびをひとつする。彼の目の下には、うつすらとクマができていた。

「原因はわかんねえのか？」

「わかってたら、とつくに快適な睡眠ができてるだろうね。ここ一週間ほど、浅い睡眠しかできていないんだ」

アメリカは眉をハの字にしながら、肩をすくめた。そうか、と言うイギリスは心配そうな顔。いい加減俺を心配しまくるのやめてくれないかな、とアメリカは思った。

「そんなんじゃあ、飯とかいってる場合じゃねえよな…さつさと帰って寝ろよ」

「えー！！眠くても食欲はあるんだぞ！イギリスが奢ってくれるなら行く！」

「はあ！？たくしようにねえな…食事中に寝んじゃねえぞ」
無自覚ではあるが、未だにアメリカに甘いイギリスは、そう言うって行こうと思っていた店までの道順を思い出す。確か、会議場から歩いて数分だ。

「ほらイギリス、さつさと行くんだぞ！」

「うるせえ、言われなくても行くっつーの！ばあか！」

二人はいつも通り、悪態をつき合いながら、会議場を後にする。

二人はお互いを馬鹿にしながらも、笑いながら歩いていった。

そう、笑いながら …。

*

「う、あー、それにしても眠いな…」

「だから飯なんて言っただけで帰って寝ればいいつつつたる」

「お腹は空いてるんだから仕方ないだろ！？」

会議場から出て歩いている最中、アメリカはまた大きなあくびをし

ていた。目元に涙がたまつて、視界が少しぼやけている。

「歩きながら寝るんじゃないぞ」

「そんな器用なことしないよ」

そう言うアメリカだったが、今にも寝そうな顔をしている。イギリスはそんなアメリカを見て溜息をついた。

交差点の前に辿り着いた二人は、道路と歩道の境目あたりで立ち止まる。たくさんの車が行き交っているのを見ながら、横断歩道が渡れる瞬間を待った。

夜、帰宅時間ということもあり、交差点ではたくさんの人が信号待ちをしている。

アメリカは眠い目をこすつて、襲い来る眠気に耐えようとしていた。ふうつとアメリカが息を吐く。同時に、アメリカは背中にどん、と衝撃を受けた。

おそらく後ろの人が誤ってぶつかってしまったのだろう。そう思った瞬間、ふらり。

アメリカは、眠気のせいで体が弱っていたせいで、当然だが身構えていなかったために、ふらついてしまった。それが、いけなかった。

激しいブレーキ音と共に、眩しいヘッドライトがすぐそこまで迫ってきているのが、見えた。

「アメリカ！！！！」

アメリカの全身に痛みが走るのと同様、イギリスの悲痛な叫び声が、辺りに響いた。

『おお、かわいそうに……。』

幼いころ、童話を読んで想像していただけだったはずの、不幸の神様の声が、聞こえた気がした。

その1 不幸に逢った日（後書き）

ありがとうございます！

お気づきになった方もいると思いますが、主人公はアメリカです。

それと、この作品では国名呼びで統一します。よろしくお願いします。

その2 再び死んだ日

「うん」

眩しい光を浴びて、アメリカは目を覚ました。

寝起きのぼんやりとした頭でも、ここは屋外だとハッキリ理解できた。

しかし、なぜ屋外にいるのだろうか。アメリカは目をこすりながら上体を起こし、辺りを見回した。

そこは、見知らぬ公園だった。

多数の子供向けの遊具が設置されている、ごく一般的な公園。ほぼ真上に昇っている、太陽の光が差し込んでいる。アメリカは、どうしてこのような場所にいるのか全く分からなかった。

「わけがわからない…」

アメリカの頭の中は混乱と疑問符で埋め尽くされていた。そして、眠る前のことを思い出そうと、必死で記憶をたどった。

そして、思い出した。

自分はおそらく、死んだはずだと。

「…え？」

近くまで迫ってきていたトラックのヘッドライト、次の瞬間の衝撃と激痛、イギリスの悲痛な叫び声。すべて覚えているのに、なんで俺は今、こんなところにいる？

しかも体は至って健康体だ。事故に遭う前の眠気だって、嘘のように消えている。

わけがわからなくてアメリカは呆然とした。

すると、公園に小さな子供達が入ってくる。ピンク色のワンピースの女の子と、黄色のパーカーの男の子だ。

子供達はアメリカの方をちらりとも見ずに、まっすぐ滑り台のほうへ行ってしまった。

無邪気な子供達の声を聞きながら、アメリカはどうすることもでき

ずに固まっているままだ。

しばらく、子供達の笑い声をBGMに、頭の中を整理しようと必死になった。すると、いきなり、ドシャっという音と共に、笑い声が悲鳴に変わった。

「い、

いやっ、いやあああああ！！

あ、ああ、カドルス！！」

滑り台の上で、女の子が青ざめた顔で叫んでいる。滑り台の下では、男の子が頭から血を流して倒れていた。どうやら、男の子が滑り台から落ちたようだ。

アメリカはそんな光景を見て、はっとして立ち上がった。ヒーローを自称する彼にとって、こんな状況をほおっておくわけにはいかなかった。

「や、いや、カドルス、」

女の子は滑り台の上でへたり込みながら、おそらく男の子の名前と思われる単語と、意味を成さない言葉を発しているばかりだった。アメリカは男の子に駆け寄ると、男の子の状態を確認した。男の子の意識はないようだ。頭からは、尋常じゃないほどの血がだらだらと流れている。

「大変だ、救急車…！！」

アメリカはそう呟くと、自分のジャケットから携帯電話を探す。すると、背後に人の気配を感じた。

同時に、鼻につく甘い匂いも。

「ねー。なにしてんのぉ？」

その声に振り返ると、そこには、棒付きの飴を啜えた少年が立っていた。

黄緑色の髪とパーカーと右目、そして髪飾りのようにくっついてい

る多数の飴。辺りに立ちこめる甘い匂いは、この少年がもとになっているらしい。

すべてが印象的すぎるその少年は、にやにやと笑いながら俺を見ていた。

「なに、って…君にはこの子が見えないとでも言うのかい？怪我してるんだ、助けないと…！」

「はあ??助ける??おにーさんなにいつてるのお??どっかのヒーローじゃあるまいしー！」

「でも早く助けなきゃこの子死んでしまうだろ!？」

「は????」

少年はとても不思議そうな顔をして首をかしげた。そして、口を開いた拍子に飴が落ちたのも気にせず、俺にこう言ったんだ。

「この街の住人なら、

生き返る、でしょお??」

…俺は、

その言葉が理解できなかった。

生き返る?なんのことだろうか。どういうことだろうか。

頭の中が、ぐちゃぐちゃになっていく。

「待って、くれ。どういうことだい？」

「えー。どういうことって、いわれてもなあ。あひゃひゃひゃ

「説明してくれよ!！」

「めんどーくさあい」

にやにやと少年は笑い、先程落ちた飴を拾った。うーんと考える仕事をしたと思ったら、ぱつと顔を上げた彼はこう言った。

「実際死んでみれば早いね!！」

はっと気付いた時には、俺がここに来る前体験した事故と同じように、暴走したトラックが俺の目の前に突っ込んできていた。

その2 再び死んだ日（後書き）

ありがとうございました！

本編2話目でしたが：やっとハピツリだと思ったらまた事故オチかーい！なんてツッコミ入れてらっしゃる人もいるんじゃないでしょうか。いないか。

ちなみにわかる人はすでにわかってらっしゃると思いますが、女の子はギグルス、男の子はカドルス、少年はナツティーです。作者はハピツリで3番目くらいにナツティーが好きです。

次の話は明日あたりアップします。

その3 ヒーローに会った日

… い、 る

… おい、 きろって てるじゃな か…

「… おい、 起きたまえ青年！」

「っ… うわあ!？」

ゴン!

「っつてえええ!!！」

アメリカは、頬を叩かれて目がさめたと思ったら、目の前には知らない男の顔があつたため、驚いて飛び起き頭を打った。もちろん目の前の男の頭で。

アメリカは打ってしまった前頭部を押さえながら、一体いつ眠ってしまったのだろうと考えようとするが、うまく頭が回らない。

「いきなり起き上がらないでくれるかな!? せっかく起こしてあげたというのに全く!」

「そ、 sorry、 びっくりしてしまっただ」

「気をつけてくれよ。死んでしまっただらどうするんだ」

男は、水色の髪に赤縁の眼鏡にスーツ姿だった。通勤鞆らしき物が手元にあつたので、おそらく通勤前なのだろうとアメリカは予想する。

が、そんな予想をしてから、やっと思考が回ってきたアメリカは、はっとあたりを見回した。

先程(?)の出来事が、鮮明に思い出される。

ここは、先程アメリカが死んだはずの公園だった。

アメリカは血の気が引いた。慌てて自分の体をあちこち触ってみる。服も見てみた。が、怪我どころか血の染み一つ無い。わけがわからなくて、アメリカはつい、がばりと頭を抱えてしまった。

「What! ? どうなっているんだい! ?」

「ん? どうしたんだそんなに慌てて。なにかあったのかい?」

男は首を傾げてアメリカを見る。アメリカは、ぱっと顔を上げると、掴みかかりそうな勢いで男に聞いた。

「君、説明してくれないかい! ? この街はどうなっている! ?」

「……………え?」

……………

男はアメリカの顔を覗き込んで、どうりで見ない顔だと思ったら、と呟いた。アメリカは、自分の背に、嫌な汗が伝うのが分かった。

「君、ここの住人じゃないね?」

男は笑いながらも少し眉をしかめていた。アメリカは頷くしかできない。

男ははあ、とため息をついて少し頭を掻いた。そして、こう言った。

「この街は、ハッピーツリーの街さ。」

そう、何度死んだって、生き返る。死ねない街」

男は肩を竦めた。アメリカは目を見開いたまま固まってしまった。死ねない街、だって?」

昔、アメリカは、まだ小さい頃、イギリスから童話を聞いた覚えがあった。

不幸の神様が創った、幸せの木の話。 『ハッピーツリーのおはなし』を。

不幸の神様は、いつもその街の人を不幸にしてしまうから、せめてもの償いとして『幸せの木』 ハッピーツリーを創った。

しかし、結局は不幸の神様が創り出したもの。

それは、とてもいびつな幸せをつくる木。

人々を生き返らせる木。

その木は、その街をだんだんと狂わせていった。

やがて街には異常な者たちしかいなくなり…ハッピーツリーの根が張っているこの街では、不幸のせいで死んでしまっても、いびつな

幸せのせいで次の日には何事もなかったかのように生き返る。街は、そんな不気味な街になってしまった。やがて街は幻となったのだが、今もどこかに存在するといわれている。

が、本当に、あったとは、思ってもみなかった。

「嘘だろう……?」

「自分の体に聞けばいいのではないかな?」

「……ッ」

アメリカは自分の胸に手を当てた。

(俺は生きている。)

死んだはずなのに、生きている。

「……で。」

君はどこから来たんだい?

ほんとはそんな体験をする前に帰ってくれたほうが良かったんだがね……ヒーローが家まで送って行ってあげよう」

その言葉に、アメリカは目を見開いて、ぎゅっと拳を握った。そして、ゆっくりと口を開く。

「……分からないんだ」

「え?」

「どうやって来たのか……分からないんだ。目覚めたらここにいた」男の表情が消えた。男は何度目かの溜息をついて、頭を抱えてから言った。

「君は……導かれてきたのかもしれない」

「導かれてきた?」

「……君は、この街の、新しい住人になるのかもしれない」

「!?!?」

アメリカは、男の言葉に驚愕した。そして同時に、

嫌だと、本気で思った。

「い、嫌、だ」

アメリカはぶるりと震える。

「嫌だよ！！こんな街の住人になるなんて！」

「…こんな街、つてねえ、君さあ」

「あ、ごめん」

男の苦笑いに、アメリカは自分の失言に気付く。こんな街でも、彼にとつては愛する街なのだろう。

「やれやれ、まあ私としても、君のような純粋な青年をこのような街に置いておくのは気が引けるからな」

「え」

「君を家まで送って行ってあげよう。ただし、時間はかかりそうだがね」

彼は、にこりと笑ってそう言った。その笑顔と、アメリカにとつての希望の言葉。それはさながらヒーローだった。

アメリカは目を見開いて、その男をただ見詰めるだけだった。

「さて。ひとまず私は仕事に行かなければならないんだ。

君、名前は？」

「え、ああ。俺は、アメリカ。ヒーローさ」

「君はなにを言ってるんだ、ヒーローは私だよ。

私はスプレندیド。よろしく、アメリカ」

「ああ、こちらこそよろしく」

男 スプレندیドの差し出された手を握り、彼らは握手を交わした。

「きゃ ああああああああああああ……!……!……!」

少し感動的なシーンは、そんな悲鳴と、それに混じる、狂気的な、高らかな笑い声に邪魔された。

その3 ヒーローに会った日(後書き)

ありがとうございました！

今回はヒーローことスプレندیッドが出演しました！スプレندیッド大好きなので楽しかったです。

次回は、ヒーローが悲鳴と笑い声のもとへ駆け付けます。わかる人にはもうわかつちやっただかな…？次回は某人気キャラの登場です。

その4 惨劇を見た日

スプレンドイドは悲鳴を聞くなり、だつと公園の外に駆けだしていった。アメリカも急いでその後を追う。

公園の外に出て、通りをしばらく行くと、そこには凄惨な光景が広がっていた。

「ははっ、ははははははは！あぁ…っはあ」
立っているのは、

笑い声を発する、緑の軍服を着た、血まみれの青年。

倒れているのは、

サバイバルナイフが胸に突き刺さっている、ピンクのワンピースの少女、

頸動脈が切られて、真っ赤な血を付けた黄色のパーカーの少年、腹部を切り裂かれ、内臓が見えている赤い髪の少女、

頭を割られて、大きな血だまりを作っている紫のシャツの少年。

アメリカはつい吐き気をもよおした。

「やっぱり彼か。全く、私の遅刻は決定だな」

アメリカの隣にいたスプレンドイドはそう呟くと、歯をむき出して笑っている軍服の青年に近づいた。

「よーお糞ヒーロー！わざわざ殺されに来てくれたのかよ！」

「朝っぱらからなにをしてくれたんだ、軍人くん。どうして覚醒している？」

「あぁ？んなことどうでもいいだろ。死ね！！」
「嫌だ」

ヒュッと青年のナイフが空をかすめる。スプレンドイドは、信じられないが、なんと空に逃げていた。

「ツチ、逃げんな糞ヒーロー！」

「逃げなければ君は私を殺すだろう？」

「当たり前だ！」

いつの間にか装着していた赤いマントを翻しながら、スプレンドイドは上空で苦い顔をしていた。軍服の青年は、悪態をつきながらスプレンドイドにナイフを投げる。

スプレンドイドはひよいとナイフをかわしてから、急降下して、青年の右腕に着地するかのようにして左足で青年の右腕を押さえつけ、青年を倒れさせた。

ちなみにその時、ボキンという嫌な音が聞こえたが、アメリカは聞こえなかったことにしておこうと思った。

「つぎあ…！てめえ、糞ヒーロー…！」

「なにかな？悪には制裁を、普通の事だろ？」

「う、あ、どけっ…！」

「嫌だ」

スプレンドイドがそう言ったのとほぼ同時に、軍服の青年の頬に涙が伝う。

スプレンドイドが青年の顔を覗き込めば、青年の瞳の色が 金色 だった瞳が、黒に変わっていた。

「ス、スプレンドイドさ、ん…ッ」

「フリッピーくんかい？戻ったんだね、よかった」

「ごめんなさい、僕、僕…ッ」

「君が謝ることじゃない、やったのは軍人くんだ」

スプレンドイドが優しく言う。青年 フリッピーは、先程の凶暴な様子が嘘のように、ただぐしゃぐしゃに泣き崩れていた。

「スプレンドイド…これはどういうことだい」

「ああアメリカ、すまない。この人はフリッピーくんといって、二重人格でね…」

おっと、すまないが私は早く行かなければいけないんだ。アメリカ、彼を送って行ってやってくれないか。詳しい話は彼自身に聞くといい」

「…わかった、早く行きなよ」

「すまないな。フリッピーくん、またね」

未だ泣き続けているフリッピーは、スプレンドイドの言葉にただ頷いた。

「じゃあよろしく頼むよ、と言が残したスプレンドイドは、よほど急いでいるのか空を飛んで勤務先へと向かっていった。

「…さて」

アメリカはふうと息を吐いた。そして、ひつくひつくとしやくり上げながら泣き続けているフリッピーを見る。

「……………君、立てるかい？」

「ひつく、…はい」

アメリカがフリッピーに手を貸し、フリッピーはよろよろと立ち上がる。アメリカは、血まみれの彼の服を見て、先程の狂気に満ちた彼の表情を思い出し、今の彼と比べてしまう。どうも変な気分だった。

「腕、大丈夫かい？病院とかは…」

「家に…行けば、つく、添え木と、包帯あります、から。っひく」

「そっか。」

「すみません……………迷惑かけて……………」

涙を袖で拭い続けるフリッピーを見ながら、平気さ、とアメリカは微笑む。

「とりあえず、家まで案内してくれる？」

「…はい」

フリッピーは右腕を庇いながら、ゆっくりと歩き始める。

アメリカの視界の端に、血みどろの少年や少女の死体が映る。しかしどうしても片付けてあげる気にならず、アメリカはそれを見なかったことにして、フリッピーと共に歩き始めた。

その4 惨劇を見た日（後書き）

ありがとうございました！

今回はフリッピー登場回でした！いきなり覚醒で出しちゃいましたね…いいじゃないか私が覚醒大好きなんだから！！

しかも初登場でいきなり腕折れるとかフリッピー…まあ初登場（？）でいきなり死んでる少年少女よりマシかな…。ちなみに、倒れていた少年少女は、順に、ギグルス、カドルス、フレイキー、トウーシーです。

次回は再びあの少年が登場です。

その5 知りたがった日

「あー！！あの変なお兄さんじゃん！！おはよー！あひゃひゃひゃ
！」

フリッピーの案内に従って道を歩いていると、アメリカが死ぬ前に
会っていた少年に出会って、アメリカ達は立ち止まる。少年はまた
棒付きの飴を舐めているようだ。

「ナツティー：知ってるの？この人のこと」

「あのねえ、昨日ねえ、会ったんだあ！でもそのあとすぐ、ふたり
で死んじゃったの！あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

少年 ナツティーは狂人のように笑いながら、フリッピーの質問
に答える。死についてそんな軽々しく話せるなんて、とアメリカは
思う。この少年がおかしいのか、この街がおかしいのか、それとも
両方なのか。アメリカは少し考えてしまった。

「ねー変なお兄さん、今なにしてるの??」

「今はフリッピーを家まで送ってるどころさ」

「へーえ。あ、もしかしてフリッピー覚醒しちゃったのお???」

フリッピーはびくりと反応し、また泣きそうな顔になる。ナツティ
ーはフリッピーの血みどろな軍服をじろじろと見ていた。

「さつきい、きゃあああつて聞こえたもんねえ。すぐ聞こえなくな
ったけど……あひゃっ」

ナツティーは飴をかみ砕く。そして棒をその辺に捨てると、パーカ
ーのポケットから新しい飴を取り出してくわえた。フリッピーは下
を向いて黙っている。

「ねえ変なおにーさん、名前なんていうの???」

「俺の名前かい？アメリカ、だよ」

「へー！僕ナツティー、よろしくねえ！！！」

無邪気(?)に笑ったナツティーは、そのままアメリカの横を通り
過ぎて、走り去って行ってしまった。

変な奴。アメリカはそう思った。
あと俺は変なお兄さんじゃない、とも。

「……大丈夫かいフリッピー？」

「……はい」

黙りこくっていたフリッピーは、小さく返事をして頷いた。どうやら、自分のもうひとつの人格のことを言われるのが嫌らしい。

「……あの子、ナッティって言ったっけ？変わったるね」

「……ナッティはこの街でも特別変わってますから」

「あの子すごく甘い匂いがするよ」

「ナッティ、甘味依存症なんです。糖尿病でもありませんけど」

「うわぁ……大丈夫なのかな」

ナッティーのことについて会話しながら、アメリカ達は再び歩き始めた。

静かな朝の道に、フリッピーの軍用ブーツと、アメリカのスニーカーの足音が響いている。

「ねえフリッピー、」

「……はい……？」

「君のことについて、聞いてもいいかい？」

「……えっと」

それは、

人格についてですよ？

フリッピーは言う。アメリカはうん、と静かに頷いた。

フリッピーは眉をしかめる。アメリカは視界の端でそれを確認した。

「ごめん、嫌ならいいんだ。」

「い、いえ。こちらこそすみません。僕は大丈夫ですから、どうぞ聞いて下さい」

「え、いいのかい？」

つい聞き直してしまうと、フリッピーは、はい、と微笑んだ。アメリカは少し驚いてしまった。

見てる限り、『僕は大丈夫』、では全然なさそうだが、それを気にするよりも、アメリカはフリッピーのことについて知りたかった。「あ、でもこんなところじゃなんですから…とりあえず僕の家で」フリッピーはそう言って、少し前方に見える、一軒の木造の家を指差した。

その5 知りたがった日（後書き）

ありがとうございますー！

いやぁ…見事にグダりましたね…ちょっと短いし。

さてこれで書き溜め分がなくなりましたので、更新がこれから遅くなると思われます。亀更新ですが、どうぞよろしくお願い致します。次回もちよっとグダっちゃうかなーと思われます……

その6 知った日

一人暮らしにしては少し広いような、そんなフリッツピーの家。フリッツピーは着替え等をしに洗面所に行ったため、アメリカは一人リビングに残されていた。

アメリカはソファーに少し遠慮がちに座りながら、一人で退屈なために、ぼおっと考え事をした。

(結構、すんなり受け入れられてる、気がする)

フリッツピーとまだ出会って数時間も経っていないのに、すでに家にまで上げられている。しかも、仕方ないとはいえ、リビングに一人残されている。

普通なら有り得ないだろうこの状況に、アメリカは違和感を覚えていた。

君は、導かれてきたのかもしれない

スプレンドイドの言葉を思い出す。街の住人に、すんなり受け入れられているこの現状。

これは、もしかしたら本当に、導かれてきたからなのかもしれない。

(……俺は、死んだのかな、

“向こう”で)

事故に遭った記憶は、ちゃんとある。あの激痛も、覚えている。もしかしたら、死んだから？

死んだから、こちらの世界に導かれてきたのか？

こちらの世界で、新しい人生を歩めとでも言うのだろうか？

(…まあ、
わからないけどさ)

アメリカは、もとの場所に帰りたいたいと思っているけれど、もし死んでいるのなら、と思うと、怖かった。

今までアメリカは、“国”が事故に遭ったなんて前例は聞いたことがなかった。だから、自分がいつたいどうなっているかわからないのだ。

(俺はどうすればいいんだろう)

アメリカは手で顔を覆った。そして溜息。わからないとしか言えなかった。

「あー！もう！」
アメリカは天井を仰いで、ソファアの背にもたれた。

(いろいろ考えても仕方ない、か)

今は、この街から出る方法を探すのが先決だと結論を出して、アメリカは考えるのをやめた。

「…そういえば、アメリカさん」
…で、合ってます？と、いきなりフリッピーの声がして、アメリカは声が出たほうを振り返る。着替えと洗髪を済ませ、洗面所からリビングに戻ってきたフリッピーが、濡れた髪をタオルで拭きながらそこに立っていた。

「僕のことを話すのは良いんですが…あなたのこと、聞いてもいいですか？」

この街に来る方なんてめずらしいですし、とフリッピーは言う。ア

アメリカは、洗面所でやってきたのであろう、すでに吊つてある状態のフリッピーの右腕を見ながら　片腕なしでよくできるなあと思ひながら　、ああ、と呟く。

「そっか、君のことを聞くのに、自分のことを話さないわけにはいかないよね」

「すみません、僕、昔から人見知り気味で…」

「大丈夫さ。それに、出会って数時間も経ってない俺を家に上げる時点で、人見知りではないと思うんだぞ」

アメリカはそう言って笑う。フリッピーも苦笑いした。

そしてアメリカはゆっくりと口を開くと、自分のことを話し始める。「俺はアメリカ。こんな名前の通り、俺は国っていう存在だよ。アメリカって国、そのものなのさ。」

まあ、擬人化された国って考えてくれれば早いかな。

一応人としての名前もあるけど…それは滅多に明かさないからね。気軽にアメリカって呼び捨てにしてくれて構わないんだぞ！」

アメリカは笑ってそう言った。笑いながら、アメリカは自分の言動を少し不思議に思う。

…本当は、自分が国だということは、あまり一般人には話してはいけないことになっている。

別に今も、自分が国だと明かす必要はなかった。

しかし、アメリカは、なぜか話してもいい気がした。

否、

なぜか話さなければいけない気がした。

「国…ですか」

「うん。信じられないかい？」

「いえ…僕は信じます。」

こんな街に住んでる以上、どんな不思議なことでも、信じられます」フリッピーは笑いながらも、少し視線を落として言った。アメリカはそんなフリッピーの様子に、少し胸に刺さるものを感じた。

「…じゃ、今度は君の番だね。教えてくれるかい？君のこと」

「あ、…はい。」

フリッピーはそう返事をした。今まで立ったままだったので、アメリカの向かいの、1人掛けのソファーに静かに座る。

そして、左手で胸元のドツグタグに触れながら、口を開いた。

「僕の名前は、フリッピー。退役軍人です。」

現役の時は、三等軍曹でした。

主にベトナム戦争で活躍して、戦争のときに…もうひとつの人格ができました。

もう一つの人格は、戦闘のときに出てきていたから…今でも、戦争のことを思い出すと出てきて、よく、周りの人を、その、無差別、に…

殺してしまうんです」

フリッピーは俯く。やはり人格のことを話すのは嫌なのだろうとアメリカは予測した。

「あ、でも、でもですよ。必ずしも殺すわけじゃないんです。

たまに、殺さないでいてくれることもあります。」

…彼は、僕を守るために生まれてきた、と、思っているみたいですから」

自分の体をぎゅっと抱きしめるかのように、フリッピーは自分の体に左腕を回す。フリッピーの顔は、少し綻んでいた。

「…君を、守るために、か」

素晴らしいじゃないか、とアメリカは呟こうとしたが、人を殺してしまったところを見た後では、素晴らしいものもない気がして思いとどまった。

あの、血まみれで笑う、狂気に満ちた姿は、おそらく忘れることはないだろう。

そう考えてから、アメリカは先程疑問に思ったことを、フリッピー

に質問してみた。

「…ところで、君が活躍したのはベトナム戦争って言ったね？」

「はい。それがなにか…？」

「俺の記憶が正しいなら、ベトナム戦争が終結したのは1975年なんだよ。もうかなりの年月が経ってるはず。」

とすると、君の年齢は？

どう見たって君は20代にしか見えないよ」

アメリカの言葉に、フリッピーは目を見開く。そしてああ、と呟いて俯いてしまった。

「…この街は、外の世界と、時間の流れ方が違うみたいなんです」

「流れ…方？」

「詳しくはわからないんですが、とにかく、外の世界より、この街での時間は遅いみたいで。」

外で何十年と時間が経っていても、この街ではたったの2年や3年だったりするんですよ。」

まあ、僕はこの街に来てから、外に出たことがないのでよくわからないんですけど」

フリッピーは困ったように微笑んだ。アメリカにとってその事実、雷に打たれたかのような衝撃をもたらしていたのだが、フリッピーがそんなことに気付くわけはなかった。

「……………そっか

急がないと、いけないのかな」

「え？」

「…いや、独り言さ」

その6 知った日(後書き)

ありがとうございました！

こ、今回は話すだけな回でしたね！うわあグダグダや…！しかも長い！

あと、これから後付け設定が多くなっちゃうかもですすみません…
次回は某鈍感さんを出したいなーなんて…あ、あくまで予定です！
次回は年明け最初かな…。ではみなさんよいお年を！

その7 大樹を見上げた日(前書き)

あけましておめでとございます。新年一発目の投稿です。最初いきなり場面が違うのでわかりづらいかもしれませんが、そのまま読み進めていただければおそらくわかると思いますので…。よろしく願います。

その7 大樹を見上げた日

「…これが、ハッピーツリー、か」

アメリカは呟いた。丘の中心にそびえ立つ大樹を見上げれば、なんとも不思議な気分になる。

アメリカは、立派な木の幹に触れてみた。ただの木のはずなのに、それはなんだか温かい気がする。

「不思議だね。」

こんな木が、死と生を繰り返させているんだろ？」

「…そうですね」

アメリカがフリッピのほうを振り向いて言えば、フリッピは頷く。アメリカはフリッピの瞳の奥に少し悲しみの色を見ながら、ハッピーツリーの幹にもたれ掛かった。

「…わあ。」

綺麗だね」

「…はい」

アメリカは、真っ赤な夕陽を見て感嘆の声を漏らした。フリッピもアメリカと同じように、木にもたれる。二人の髪の毛が、風に吹かれて揺れる。

ここは街の中心、ハッピーツリーの丘。

街の東端に日が沈むのが見えるこの場所は、フリッピが密かに大好きな場所だった。

「素敵な街だね」

アメリカが呟く。

今朝は、こんな街だなんて言ってしまったけれど。十分、ここは素敵な街だと、アメリカは思った。

何故、今二人がここにいるかと言えば、話が終わったあと、アメリカがハッピーツリーを見に行きたいと言い出したからだだった。

見に行くならばと、フリッピーが街を見て回ることを提案し、街を歩いて回ってから、二人はこの丘に来た。

アメリカが思っていたより大きかったこの街は、いろいろな施設や店などが立ち並んでいて、見るだけでも面白かった。

この街が実は幻だなんて、いったい誰が信じるだろうと思ったくらい、街は楽しさや面白さに溢れていた。

ただ、アメリカは、知らないのだ。

そんな街でも　　いつだったかはもう忘れられたが　　たとえこ
であるうと、惨劇が起きたこと、

いま二人が立っている場所も、回ってきた場所も、過去、血だまり
が出来ていたこと、

そこに死体があったこと、

不幸と幸せが、繰り返されたこと。

そして、

これからも繰り返され続けるであろうということ。

フリッピーは赤い夕陽を見ながら、頭上で揺れるハッピーツリーの
枝と葉の音を聞いて、アメリカには見えないところで拳を固く握っ
た。

「…あれ」

アメリカが、手元の違和感に気づいて、声を発した。

アメリカは木のほうを振り向き、ちょうどアメリカの手の位置ぐら
いについた、無数の傷を目にした。

「これ、傷？」

おそらく、斧でつけられたと思われる傷がそこにあった。古いもの
も、新しいものも。

アメリカはそれに触れながら、どうして傷なんか、と小さな声で言
う。

「誰かが、今でも切り倒そうとしてるんですよ」
無駄なんですけどね、とフリッピーは苦笑する。フリッピーもアメリカと同じように傷に触れた。

「もう街中に根が張っているから、無駄なのに。」

それに、切り倒そうとしたって、切り倒せないのに。」
フリッピーは、木から目を逸らした。

アメリカはそんなフリッピーを見てから木の根本を見て、あることに気付き、息を呑んだ。

根本やその付近のところに、ほんの少しではあるが、こびりついている赤黒いもの。飛び散った液体のようなそれが、一体なんなのかは、容易に想像することができた。

そうか、ここは街の中心。

不幸の神様の一番近く。

「さあ帰りましょう、アメリカさん。日が沈みきってしまう前に」
その声にはっとして、アメリカは顔を上げる。フリッピーが、優しく笑っている。

「あ、よければ、今日はうちに泊まって行って下さい。幸い、客用の日用品は色々揃ってますから」

夕陽は沈みかけている。丘を降りて、早く帰らなければ。そう思った。

アメリカはフリッピーの言葉に快く頷いた。

「ありがとう、嬉しいよ」

そう言ってアメリカは笑って、フリッピーと共に丘を降りた。

ハッピーツリーは、ただ風に揺られて、ざわざわと音をたてているだけ。

その7 大樹を見上げた日（後書き）

ありがとうございました！

ひええ、書きたいこと書きなぐったらわけわかんなくなりましたすみません、ひええ

てか某鈍感さん出せませんでしたね…！次回出ます！次回！

っーか作者はどんだけフリッピーが好きなんだと。アメリカとフリッピーだけで2話も進んでるよと。フリッピー大好きですどうもすみません。

次回はやっとな夜ですなー。某鈍感さん出します！出来れば他の大人組も！

頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8440z/>

幸せの木と狂った世界と。

2012年1月6日00時47分発行